

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

第 135 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成16年 3月21日

アメリカイソシギ



2003. 5. 18 浦幌町字厚内 撮影者 野呂 一 則

〒089-5865 浦幌町字厚内11-11



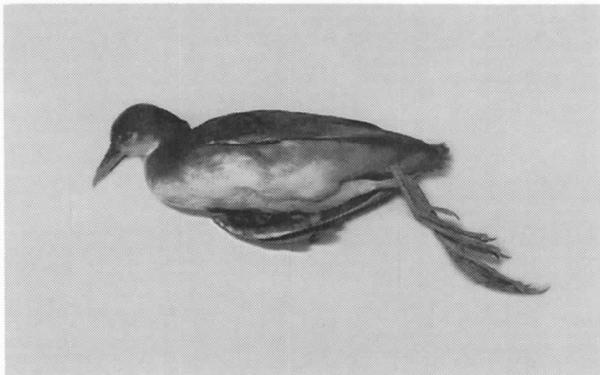
も く じ

江別市大麻でシロハラクイナ 付：北海道でのこれまでの記録	広 報 部	2
白老町ポロト湖の野鳥	中野 嘉陽	3
八戸航路ゴキゲン船旅	白田 正	6
アメリカイソシギ・カナダヅル観察記		
	野呂 一則	8
シジュウカラ黒化個体の観察	高橋 良直	9
檜山支庁管内の5つの河川の水鳥類		
	富沢 昌章	10
探鳥会ほうこく		12
鳥民だより		13
宿泊探鳥会案内		13
探鳥会あんない		14

江別市大麻でシロハラクイナ 付：北海道でのこれまでの記録

広 報 部

2003年9月27日に江別市大麻泉町の住宅窓に衝突した野鳥1羽があった。地元の指定獣医に持ち込まれたものの、翌日死亡しており、野幌森林公園の自然ふれあい交流館に届けられた。この鳥は複数の関係者による観察の結果、シロハラクイナの幼鳥であると同定された(写真参照)。成鳥に特有の上嘴基部の赤はなく、腹下面は灰色に近いものであった。バンの幼鳥である可能性は、下尾筒が茶色であり(バンでは白色)、脇腹の白い縦斑がない(バンにはある)ことなどから否定された。体各部の計測値などはここでは省略する。



シロハラクイナは中国南部から東南アジアを中心として分布する。日本では沖縄県で留鳥であり、九州などでも繁殖例があるが、それより北ではまれである。愛護会として把握している北海道での記録を、公表されたもの、および未発表ではあるが確かと考えられるものを古い順に以下にあげるが、今回のものを含めて7例にすぎない。

① 1983年12月23日 苫小牧市勇払。成鳥を保護。治療、回復後、飛行機で沖縄に帰した(北海道新聞1983年12月27日)。

② 1988年9月30日。十勝管内大樹町更生。幼鳥を観察し写真撮影(飯嶋良朗、1989. 北海道におけるシロハラクイナ *Amaurornis Phoenicurus* の観察例, 日本鳥学会誌 37: 45-46)。

③ 1989年11月22日。札幌市中央区北海道庁前庭で保護され、翌日、同市白石区東米里にて放鳥された(山田良造、1991. 北海道に舞い降りた迷鳥たち [8]. 北海道野鳥だより86: 7-9)。成幼不記載であるが、文面、写真(白黒)からは成鳥とみなされる。

④ 1995年10月19日。檜山管内上ノ国町。幼鳥を保護。回復に至ったが、その後の経過は不明(北海道新聞1995年10月20日)。

⑤ 1997年10月16日。札幌市北区篠路在住の人により、札幌市内で保護された幼鳥が円山動物園に持ち込まれ、回復に至った。前後の詳細は不明。当時、円山動物園に勤務していた白澤昌彦氏(現愛護会代表幹事)による写真が残されている。

⑥ 2003年5月4日。天売島。野鳥講座においてパークゴルフ場で観察中の19人が成鳥1羽を観察。翌5日にも観察されている(天売島Seabird Sanctuaryのホームページおよび私信)。

⑦ 2003年9月27日。江別市大麻泉町(今回の記録)

7例中、自然状況下での観察は②と⑥の2例のみであり、保護されたものが4例、そして今回の事故による収容・死亡例である。北海道はシロハラクイナの生息域からかなりはずれている。基本的に北海道での記録は、何らかの原因により本来の移動コースを大きくはずれて北海道に迷行し、衰弱、保護に至った個体とみなされるであろう。

白老町ポロト湖の野鳥

中野嘉陽

はじめに

原稿依頼のお電話をいただいた時は、何かコラムに体験風の文を書く程度のことと考えて、気軽にお引き受け致しました。ところが数日後送られた「野鳥だより」を拝見しびっくり、道内各地で活躍されている著名な研究者ばかり、しかしいったん引き受けたものを辞退することもできません。覚悟を決めて冬のポロトに通いました。

1 ポロト、すばらしき環境

ポロト：アイヌ語で大きい沼という意味だそうです。

どっしりと構えいつも物静かで、天然の森とともに多くの生き物たちの生命を育む母なる地です。周囲は約4km、面積は33haです。

昭和53年、湖を含め周囲一帯401haが林野庁から「ポロト自然休養林」に指定されています。

平成14年、日本の自然・文化・歴史遺産を再発見しようというねらいで実施された「遊歩百選」に選ばれ、知名度

が一段と上がりました。外周6kmの散策路がほどよく整備されています。また、足に自信がある方には奥に向かって樽前山や遠く羊蹄山の眺望も楽しめる遊歩道があります。

ポロト湖は清流ウツナイ川から始まり、ポロト湿原やヨコスト湿原、ポント沼（小さい沼）など大小様々な水環境が連なっています。

2 ポロト「わたしの出会った野鳥」

苫小牧の佐藤辰夫氏を初めとする専門家の調査によるとポロトには140種の野鳥が確認されています。（本誌“北海道野鳥だより”第68号参照）

私は記録も正確に取っていませんでしたので、「わたしの出会った野鳥」ということでまとめてみました。

☆沼の鳥

オオハクチョウ、ダイサギ、アオサギ、オジロワシ、オオワシ、オナガガモ、キンクロハジロ、カワアイサ、カワセミ、ヤマセミ、ホシハジロ、マガモ、カルガモ、カイツブリ、オシドリ。

（まだまだたくさんいるのですが、距離があって正しく確認できませんでした）。

☆川の鳥 湿原の鳥

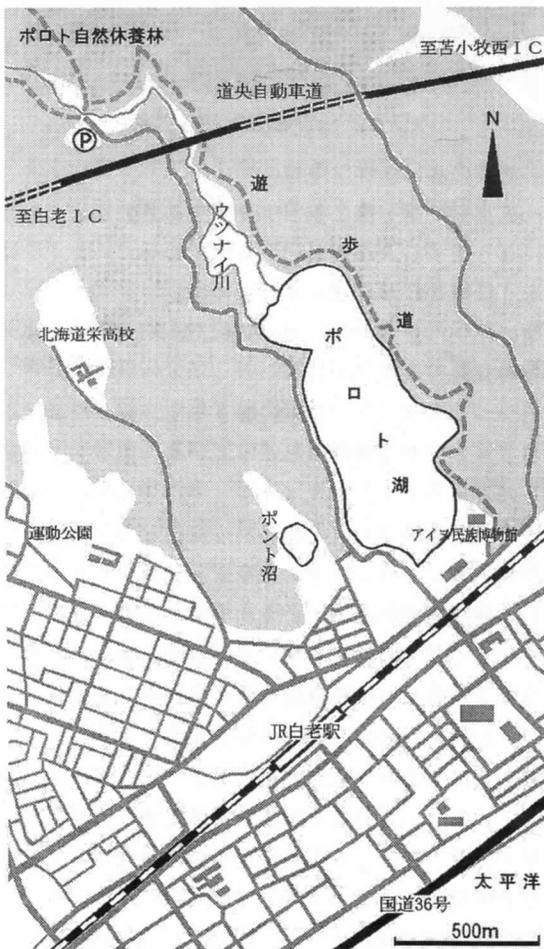
カワガラス、ミソサザイ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、コヨシキリ、オオジシギ、クイナ、アマサギ。

☆森の鳥

ウグイス、エゾムシクイ、センダイムシクイ、アカゲラ、コゲラ、ヤマゲラ、キバシリ、オオコノハズク、アオバズク、フクロウ、ヨタカ、ウソ、イカル、アカハラ、エナガ、メボソムシクイ、キクイタダキ、クロジ、カケス、シジュウカラ、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、ゴジュウカラ、ハイタカ、ノスリ、ヒヨドリ、マヒワ、コマドリ、キビタキ、カッコウ、ホトトギス、ツツドリ、ジュウイチ、アオジ、オオルリ、コルリ、ルリビタキ、ミヤマホオジロ、アオバト、キジバト、アカショウビン、ツグミ、クロツグミ、トラツグミ、キジ、メジロ、ヤブサメ、コサメビタキ、ホオジロ、イスカ。

☆町との隣接地

ハシブトガラス、ハシボソガラス、トビ、スズメ、ニューナイスズメ、カワラヒワ、カササギ、ムクドリ、コムクドリ、オオセグロカモメ、ツバメ、モズ、キレンジャク、ヒレンジャク、ノビタキ、ベニヒワ、アトリ、オオマシコ、ベニマシコ、ヒバリ、エゾセンニュウ、シマセンニュウ。



白老町ポロト湖周辺図

3 ポロトを代表する野鳥たち

(1) カッコウ科が運ぶ季節の風

早春、ポロト湿原では枯れ草を押上ながらミズバショウが緑の頭をもたげて来ます。なまはげみたいなヤチボウズも青く色づく柄に似合わず優しい表情になります。

ゴールデンウィークの話題で楽しい会話が弾むころ、森の奥から渡って来て間もないツツドリが演奏を始めます。ポポポポポ ポンポンポンン・・・リズムカルな音が湖水を伝わります。

カッコウ科の2着はカッコウ。5月下旬、種まき鳥がやってくると狭いながらも菜園作りに忙しさが加わります。

例年、初鳴きを記録している人によると、

2003年・・・5月24日 2002年・・・5月22日

2001年・・・5月31日 2000年・・・5月25日

ザゼンソウを探しながら湿原を歩いていると、ウグイスのけたたましい警戒の声、近づき過ぎ?ごめんなさいと謝っているとカッコウがバタバタと飛び立ちました。托卵をめぐるトラブルがあったのでしょうか。「卵を産もうとしていたところを見つけれられてあわてて飛び出した」というのはあくまでも想像ですが。

初夏の声とともにやってくるのはホトトギスでしょう。私自身は姿を見たことはありませんが、トッキョキョカキョク(特許許可局)の声が迎りが静かな夜中から早朝にかけて森に響きます。ホトトギスはこちらの方ではこれまでにほとんど報告はないようですが、聞くところによると同じ時期に伊達・虻田や室蘭・登別方面でもよく声が聞かれるようです。もしかしたらポロトの森の小鳥に托卵しているのかもしれない。何とか確認したいものです。

ジュウイチは本当に「ジュウイチー」と鳴きかわいい感じがします。姿を現しません声は聞こえます。

(2) 夏の宝石 カワセミ

インフォメーションセンター前の湖面に張り出した巨木ミズナラに止まり、水面をじつとうかがう・・・ねらいが定まると一直線に飛び込み、見事に捕らえ、近くの切り通しにある巣穴に運ぶ。日に何度も繰り返される光景です。巣は8個あります。

近所に住んでいる方の庭にはポント沼の水が流れるようになっていて、天然の淡水魚が豊富です。「家の中からカワセミが見られて、最高の幸せです」と言います。

湖にはコイ、フナ、ワカサギ、ウグイ、アメマス、ヒメマス、ニジマスなど多くの魚が生息しています。ワカサギは白老漁業協同組合で卵の放流を行っており冬期間は4,000人もの釣り人でにぎわいます。町史をひもとくと、「大正初期から漁獲量の減少による漁業不振のばん回を回すため白老村のいたるところにある天然の沼と河川を利用しての養魚事業を推進した」とあります。豊かな淡水魚はそのころの名残かもしれません。

1月11日、自然が大好きな知人がウツナイ川でカワセミを見つけて撮影してくれました。冬期間も渡らずここに残って輝く美しさを見せてくれた事に感謝しました。

ポロトには湖面に大きく張り出したミズナラの巨木やハンノキがたくさんありヤマセミも狩場として利用しています。



カワセミ 菅原弘行氏 撮影

(3) 落葉の森はキツツキ科

秋、広葉樹が葉を落とすとアカゲラの活動がよく分かるようになります。人が近づいても逃げません。すぐそばを羽音をうならせながら飛んで行きます。

湿原には枯木が多いため、虫の種類が多くキツツキにとっては冬の食料貯蔵庫です。

木をつつく音がリズムカルに響きます。静かな森にこだまするドラミングは体内にしこっている「雑音」を追い出してくれるようです。

アカゲラが営巣にしたと思われる樹洞がたくさんあり、お下がりをゴジュウカラやニューナイスズメなどが入口を改良して拝借しています。アカゲラは冬になると町の方にもよくやって来て脂身をつついていきます。赤、白、黒のコントラストが美しいこの鳥は大変人気があります。

アイヌ民話に次のような言い伝えがあります。

アカゲラはあまり人を恐れず近くまで来てはトントンとついている。小さいころ畑仕事に親に連れられて行くときよく見かけた。あまりにも鮮やかな色の鳥だから父に「きれいな着物を着ているからうらやましい」というと父は「鳥が着物を着るものか」といっていつも笑われた。また、この鳥をむやみに獲ったり殺したりするものではない。も

しこの鳥を殺した男がいたらその男は着るものに恵まれないで一生ぼろぼろの着物しか着られなくなる。

ヤマゲラがピョーピョーと大きな声を繰り返しながら飛んで行きます。数は多くありませんがクマガエラの声の聞いた人にたびたび出会います。

細い枝にはコゲラが集まります。この鳥も人を警戒しないので、すぐそばで観察することができます。

(4) 氷上のダイサギ

ダイサギが冬に普通に見られるようになったのは平成14年ころからだと思います。12月始めから目につき、冬を過ごしています。

15年初冬、ポロト近くに住む方から「白いサギが来ている」と電話があり、カメラをもって出かけました。以後時間を見つけて観察を続けるが、なかなか警戒心が強い鳥で近づくことができません。1月中旬には段々慣れ2、3人にカメラを向けられながらもハンノキのてっぺんから逃げようとしません。ポロトでは氷の上にアオサギと並んで2羽が休んでいました。アオサギの方が体が大きいはずですが並んでいるとダイサギが大きく見えます。

12月初旬には多いときで7羽いましたが、水面積が増すにつれて3羽、2羽、1羽と少なくなって来ました。1月中旬になると結氷が広がり見る機会が少なくなりました。全面結氷した18日には南の川で2羽見ることができました。昨年の例から考えると白老で越冬するものと思われます。

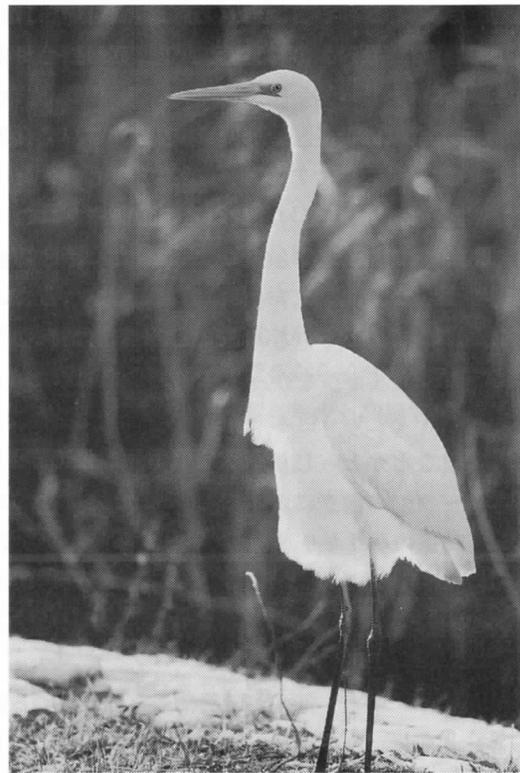
サギ科は開発によってどんどん営巣地を奪われ、数を減らしていますが、ポロト一帯や白老町にはたくさん集まって来ます。アオサギは冬期間も20~30羽います。ただし夏期間と冬期間が同じ個体なのかどうかは未確認です。

ヨコスト湿原は温泉の湯が少し流入するので冬も暖かく、魚も多いのでサギ科を初め野鳥たちの食料基地です。ポロト湖が全面結氷するところにやって来て食事をし、ポロト湖で休息、羽繕いをし、夜はポント沼で休んでいます。

アマサギも多いときで7羽確認されています。若葉のころにやって来る夏鳥ですが繁殖は確認されていません。あまり長く滞在していないようです。白老牛の放牧地があちこちにあり、アマサギは黒牛の後をついて歩き牛が追い立てた昆虫をいただいています。見ていると、白と黒の動きのあるコントラストがおもしろい。牧場の方の話では、背中に乗かって虫をとることもあるようですが牛は全く気にしないどころか、うるさい虫を取ったり追い払ったりするのでありがたい存在のようです。

記録によればチュウサギもいるようです。

10年ほど前から苫小牧-白老に定住し、営巣もしているカササギが町の人の話題になります。特徴のある大きい姿、変わった鳴き声、10羽前後の群れを作って行動し目立ちますが、カラス科です。



ダイサギ 菅原弘行氏 撮影

(5) 年中無休、カラ類

1月の暖かい日、森を歩いていると笹の中からカサカサと音がします。何か小動物が動き回るような感じで、あちこちから聞こえて来ます。じっと目をこらして見ると、ハシブトガラです。何かを見つけて食べているのでしょうか。

笹の中にかままっているヤマブドウの葉をつついてのが見えました。何が食料になるのでしょうか。ブドウの実でも残っていたのでしょうか。

丸まったブドウの葉を採って開いて見ました。中から出て来たのはクモです。じっと身を縮めて動きません。冬眠中なのでしょう。

カラ類やエナガ、キクイタグキ、キバシリなどの小さな鳥が微細な虫、虫卵やサナギの隠れ家を見つけ、採食してくれるので虫による森林被害が少なくすむのです。

湖畔はハンノキが多い。小さな種が雪の上にはばらばら降っています。ここにはカラ類やエナガが混群を作って採餌します。マヒワの群れが集まって来ます。

カラマツ人工林もあり、小さな鳥たちは冬の食料に恵まれています。シジュウカラは1月の寒い森でツピーツピーとさえずって春を感じさせます。

4 野鳥たちの「ふるさと2000年の森」へ

(1) ウツナイ川

ウツナイ川はポロトの北西ホロホロ山系の伏流水が流れる清流です。下流に来てポロト湿原を潤し、クレソンなどの水草を育てます。年間を通して水量はほぼ一定で枯れた

り暴れたりすることはありません。

湖からの流水はポロト湖畔低湿地帯を通り、海岸近くで潤沢なヨコスト湿原を形成し、太平洋に流れます。ヨコスト湿原は近年乾燥化が著しく、動植物の生息に大きな影響を与えています。

(2) 多様な樹木

冬の森を遠くから眺めると天然林をベースに、昭和20年代に植林されたカラマツ、トドマツ人工林が1haほどのまとまりで斑模様になっているのがわかります。

過去、噴火の被害が少なかったこの森には大人が3人手を回してようやくという巨木ミズナラ、イタヤカエデ、ハリギリ、クリなどがどっしり構えています。「白老水と緑のネットワーク」の調査によると、胸高幹回り5.6mのミズナラや5.76mのハリギリ(樹齢300~400年?)が確認されています。幹回り3m以上の巨木は現在130本見つっています。巨木には樹洞が多く、野鳥や動物たちに快適なすみ家を提供しています。

天然林は高木・中木・低木が階層構造を作り、つる植物がからみ、地表には林床植物が生えています。実のなる木もたくさんあります。

雪の少ない白老では真冬でも雪間が多く、大木の根回りにはぽっかり雪えくぼができます。枯れ草をかぶりながらフッキソウやナニワズが青々と茂り、雪原のオアシスです。

ミヤマホオジロが草の種をついばみにやってきます。ちよつと草をかき分け見ると簡単にクモや昆虫を見つけることができます。エゾリスやカケスの食料貯蔵庫になっているようで春になるとミズナラの芽があります。

前述のように、森の鳥が多いのは各種類に対応した多様な樹木などが織りなす豊かな環境のお陰です。

(3) 生き物たちの湖畔

湖畔にはミズナラやハンノキが育ち、日光を求めて水面に張り出しています。少し辛そうな姿勢の樹木もありますが鳥にとっては誠に恵まれた環境です。

水辺にはハンノキやヨシ群落があり、湖岸の植物は昆虫、魚類、藻類、微生物などの生き物と共生しています。

おわりに

自然休養林一帯は環境庁の“鳥獣保護区”に指定され、主として胆振東部森林管理署が管理しています。しかし、なんとといっても四季を通して毎日ここを訪れ、鳥を愛し花を愛でる多くの人々の支えがあってこそ豊かな自然が守られて行くものと思います。

最近、ポロトのよさを学び、多くの人々に伝えようという団体が作られ活動をしていることはうれしい事です。

- ・白老水と緑のネットワーク
- ・植物ボランティア・サリカリア
- ・日本野鳥の会白老支部
- ・ポロトの森ネイチャーガイドめむの会
- ・一樹会

白老町は町民ぐるみで「ふるさと2000年の森」を守り育てて行こうとしています。

〒059-0906 白老町本町1-1-30

八戸航路ゴキゲン船旅

白田 正

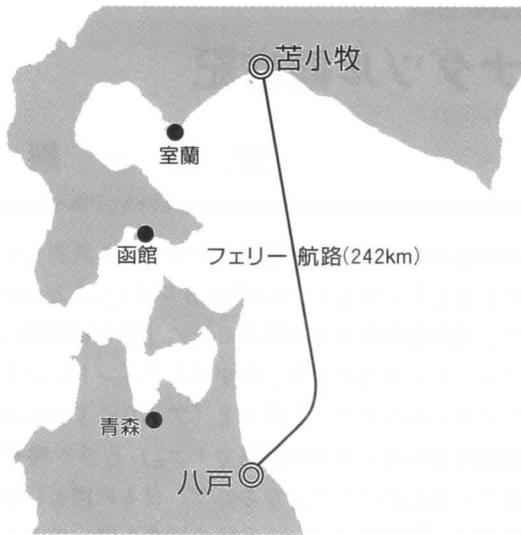
昨年は、苫小牧-八戸航路での洋上のバードウォッチングの船旅に何度か行ってきましたので、その行程のあらましと魅力などを紹介いたします。ベテランの諸先輩にうかがうと、当たりはずれのはげしい探鳥コースとのことでしたが、同行したメンバーに恵まれて、乗船した2月、4月、7月、8月とも、海鳥当たりのゴキゲン船旅でした。

特に、4月にでかけたときは八戸出港直後にハシボソミズナギドリの数万と思われる大群に遭遇し、そのまま苫小牧入港直前まで優雅な飛翔を楽しみました。

それは、八戸出港の際のカモメ達の舞う旅情を誘う風景をあとにして、沖合いに出たときの事です。船を追い越して水面をかすめるように北へ北へと目指してゆく群れが現れたのです。同行の師匠によるとこの時期、北太平洋の餌場に向かうこの鳥の大移動とのことです。図鑑を参照し

てみましたら、まさしくオーストラリアのタスマニア島を繁殖地とする、ハシボソミズナギドリです。船の後方に立つ航跡には無数の個体が群れ、次々と羽ばたいては通り過ぎてゆきます。その姿はなんとも美しく、のびやかに翼をひろげて滑翔する姿は、ときおり陽の光を映してかすかに銀色に輝き、思わずパチパチと拍手したくなるほど素敵でした。

それと、小鳥達の春の渡りにも遭遇しました。甲板で海面をながめていると、目の前をチチッと鳴きながら飛ぶハクセキレイが船を追い越して行きます。しばらくするとまたチチッと鳴く声が再びきこえます。先ほどのハクセキレイのようです。なんと、上部甲板に降り、翼を休めているではありませんか。ちゃっかりと無賃乗船しているのです。また、コサメビタキと思われる小鳥の一群が、ひそかに洋



上を飛んで行きます。こちらは無賃乗船する気配はなく、海上を見え隠れしながら去って行きます。彼らの北に向かって一心不乱に飛ぶ姿は本当にけなげで感動しました。思わず「がんばれよー」とエールをおくりました。

この他、2月には水面から湧き上がってくるように現れた約千羽ほどのエトロフウミスズメや、波間を飛ぶアカエリヒレアシギ、ハイイロヒレアシギなどを楽しみました。

また、夏場の航路では目の前の海面からふわっと浮かび上がり悠然と飛ぶコアホウドリやクロアシアホウドリ、またガッシリした精悍な体躯で直線的に飛ぶフルマカモメの美しい飛翔が目には焼き付いています。さらに、やや高いところを群れて飛び、船とすれちがって南へ渡って行ったシギ・チドリ類の元気な姿も印象に残っています。

たくましき 生命の在りて い群れ飛ぶ
ミズナギドリは しろがねに映ゆ

1. 行程

(1) 利用した航路 (平成15年8月現在)

川崎近海汽船(株) (シルバークイーン)

・予約センター：0120-539-468

・連絡先：0144-34-1181 (苫小牧)

0178-28-2018 (八戸)

・旅客運賃：片道3,980円 (各種割引有り)

(往路) 21:15 苫小牧フェリーターミナル発
(20:00 乗船開始)

04:15 八戸フェリーターミナル着

(復路) 08:45 八戸フェリーターミナル発

15:45 苫小牧フェリーターミナル着

(2) バードウォッチング

八戸到着後出港までの間、港周辺を探鳥。

八戸出港から苫小牧入港まで船上より探鳥。

2. 観察用具

双眼鏡の他、望遠鏡もあるとよいでしょう。なお、ゆれる船の甲板で飛んでいる鳥を望遠鏡の視野の中に捉えることは、はためで見ていると結構難しそうですが、なれると比較的簡単にできるようになります。筆者は手製の粗末な照準器を使っていますが、これにより上空を飛ぶ鳥も何とか追うことができます。なおC社製のスタビライザーの付いた高倍率の双眼鏡を試用させてもらったことがあるのですが、なかなか良かった記憶があります。

また、鳥の図鑑ですが、できたらイラストや写真による内外のものを持ち寄り、比較しながら利用するのも楽しいものです。

3. 乗船にあたって

(1) 食事

船内ではカップ麺など、軽食を入手することができますが、往路・復路を含め3食分の食料を持参したほうが無難です。なお、往路の苫小牧出港前にフェリーターミナルのレストランで夕食を済ます手もあります。

また、八戸港のレストランは、季節により早朝の営業をしていないことのほうが多いようです。復路出港前の利用を予定する場合は、営業時間を確認しておくことが不可欠です。

(2) 服装

ともかく、船内は暖房が行き届き暑いくらいなのですが、航行中の甲板はふきさらしでやたらと寒いのです。真夏であっても春・秋の服装、春・秋であれば真冬の服装、冬期であればおおげさに言えば南極越冬隊かヒマラヤ遠征隊なみの服装といったように防寒には十分留意したいです。

(3) 乗船予約など

満員のため乗船できないことはあまりないのですが、お盆や連休にぶつかる場合など心配の向きは、事前に電話予約をしたほうが良いと思います。なお、苫小牧出港の際、乗船開始は20:00ですので、港には早めに到着をしておいたほうが良いでしょう。

(4) その他

船室では貸し毛布 (有料) を利用することができますが、できたら寝袋を持参したほうが、より快適な睡眠をとることができると思われます。なお、船は7,000t級の大型船なので、よほどの悪天候でないかぎり、揺れはあまり気になりません。

また、往路は夜間の航海となりますので、船室ではとかく鳥談義などで盛り上がる場合があります。消灯の22:00以降はレストランルームに移動してその続きを楽しむことも可能ですが、翌日の航海を考えて、お酒は控えめに、早めにお休みになることをお勧めいたします。

〒064-0913 札幌市中央区南13条西18丁目1-3

アメリカイソシギ・カナダヅル観察記

野 呂 一 則

2003年5月17日。私は早朝から浦幌野鳥倶楽部の仲間とともに町内の林道へ夏鳥の観察に出かけていました。この日、天候は曇りで鳥の方にもあまり活発な動きがありませんでした。それでも、オオルリ、キビタキ、マミジロなどを見ることができ、次の目的地へと移動することにしましたが、いったん私は家に戻りました。浦幌町字厚内の厚内川の河口から300m程上流に架かる私が毎日通る橋を通過した時のことです。車を走らせながら何気なく川の中を見るとシギと思われる鳥が歩いていました。ふだんの朝の通勤途中や、仕事を終えての帰宅途中であったならば「この時季にこの場所ならキアシシギかイソシギあたりだな」とそのまま通過しているケースでしたが、この日は前述したように早朝から鳥見モードに入りっぱなしだったので、一応確認すべく川面が見られる場所へ車を戻しました。



アメリカイソシギ 2003年5月17日 筆者撮影

双眼鏡を取り出すとその鳥が目の前を横切っていきます。距離にして10m程でした。双眼鏡を使わなくても特徴がよく分かりました。嘴が黄色く、先端が黒っぽい。喉から腹にかけて黒い斑が散らばっている。眉斑は真っ白で過眼線はくっきりと細く真っ黒。こんなシギは見た記憶がありませんでした。特に、嘴の黄色がこんなに鮮やかなシギは初めてでした。持ち歩いているフィールドガイドには該当する鳥が見つからなかったため、とりあえずデジスコップで撮り、いったん家に戻ることにしました。手持ちの日本の鳥の図鑑等を調べても「これだ」というシギは見あたりませんでした。お恥ずかしい話ですが、この時点で私は、まだ見たことのないチシマシギくらいかなあ、と思っていました。

このまま曖昧にしておくのもいやだったので、斜里に住

む知人に撮ったばかりの画像をメールで送り識別して貰うことにしました。すると、その知人からすぐに電話がかかってきて、受話器を取ると彼は真っ先に「日本初記録になると思うよ!」と言うのです。私が「え? ホントに? そんなかたじけない鳥なの?」と聞くと「アメリカイソシギですよ。ほぼ間違いなく日本初記録ですよ。」とやや興奮気味に教えてくれたのでした。なるほど、日本の図鑑に出てないわけです。数冊持っている海外の図鑑を開いてみると、おお! まさしくアメリカイソシギ。これはほんとに日本初記録になるかも知れないと思った私は、きちんとした写真を残しておこうと現場に戻り、カメラのシャッターを何度も押したのでした。

この鳥の行動の殆どは餌探しのようです。同場所にはキョウジョシギ、キアシシギ、イソシギなどがいましたが、それらと行動することはなく、イソシギと同じように尾を上下に振りながら常に単独で動き回っていました。鳴き声を聞いた覚えがあるのですが、記録していなかったためどのように鳴いたのかは分かりません。一度、川の中から小魚をつまみ上げ、嘴でつついているところを見ましたが、食べていたのかどうか分かりませんでした。

結局この鳥は17日~19日まで姿を見ることが出来ましたが、その後見ることはありませんでした。3日間での観察者は14~5名程でした。発見現場は小さな集落の小さな川で、こんな所で? というような場所です。どんな所でもまめに観察することの大事さを改めて思い知らされた、今回のアメリカイソシギ観察でした。

なお、適切な識別をしていただいた斜里在住の川崎康弘氏に感謝申し上げます。



カナダヅル 2003年11月11日 筆者撮影

次に、本道では観察例の少ないカナダヅルの観察状況について書きます。2003年10月14日、十勝に飛来している雁の観察に出かけた時のことでした。午前、豊頃町幌岡の通称大沼の側の草地の横を通った時です。私の車に驚いたのかグレー色の鳥が飛び立ちました。後ろ姿だったためすぐにはなんの鳥か分かりませんでした。飛ぶ姿が横に見えた時にツルの仲間だなと思いました。すぐに視界から消えましたが、付近を探しているとタンチョウ2羽に追い払われるように戻ってきて、沼近くの草地に降り立ちました。カナダヅルでした。すぐにまた飛んでしまい、結局この日は以後姿を見ることはありませんでした。10月下旬に今度は浦幌町朝日地区に同個体と思われるカナダヅルが出現しましたが、一日で移動したらしく見あたらなくなりました。11月2日、再び豊頃町幌岡に現れ、牧草地で餌を採っていました。この日は数名で確認することができました。

その後は主に豊頃町内で観察されましたが、よく見ることができたのは刈り取り後のデントコーン畑で、2羽のタンチョウ(成鳥)と行動をとともにしていることが多く、まれに別の3羽のタンチョウと行動することもありました。地上では殆どの時間餌を採ることに費やしていました。ま

た、図鑑等には「日本では殆ど鳴かない」との記述が見受けられますが、この個体ではそんなことはなく、タンチョウとともに鳴く姿が見受けられました。11月22日10時頃だったでしょうか、大沼の近くの草地に2羽のタンチョウと一緒にいた時のことです。親子連れと思われるタンチョウ3羽の威嚇を受けて飛び立ったのを最後に姿を見せなくなりました。その後の調べで、同日14時頃、阿寒町国際ツル保護センターに降り立ったのが確認されています。おそらく同個体と思われます。春に再びタンチョウと共に現れる可能性はあるのでしょうか。

〒089-5865 浦幌町字厚内11-11

[編集部より] アメリカイソシギについては、2003年6月6日の北海道新聞全道版にまずカラー写真付きで掲載され、またバーダー誌(文一総合出版)第17巻第9号(2003)にも紹介されました。日本では過去に記録がありませんでしたので、野鳥図鑑などには載っていません。今回のものが日本初記録として将来に残されるだろうということを考慮し、野呂さんをお願いして寄稿していただきました。

シジュウカラ黒化個体の観察

高橋良直

シジュウカラの黒化個体と思われる鳥を観察したので経過を報告する。

2003年11月13日、札幌市手稲区のSさんという方から私あてに「自宅の庭のエサ台に見慣れない、真っ黒な小鳥が来ている」とのメールをいただいた。メールには意欲的に撮影したその鳥のデジタル写真が添付されていたが、それは、背中では幾分明るい灰色で頭から胸、腹まではほぼ真っ黒というものであった。体全体のバランスやくちばしの形からカラ類のように思われたが、種はまったく見当がつかない。鳥仲間に外国の図鑑を調べてもらったが、該当するものはないようであった。

その鳥は、その翌日も庭に現れたということであり、たまたまSさん宅が私の自宅から近いことが分かったので、翌々日15日朝、私自身がこの家を訪問し、2時間ほどの間庭でこの鳥を観察させていただいた。

大きさはスズメくらいで、背中はいくらか緑色がかかった明るい灰色だが、一見したところでは全身真っ黒、クロジよりも黒い感じであった。よく見ると目のまわりや頬の部分に白い斑点がある。この鳥は生垣の繁みに隠れていることが多かったが、何度かエサ台に現れ、ピーナツ片やヒマ

ワリの種をくわえて行った。ヒマワリの種を脚で押さえ、くちばしで殻を割って食べるというカラ類特有と思われる行動も見られた。動きはカラ類同様にすばやい。この時間ほかにスズメ約20、シジュウカラ、ゴジュウカラ各1がエサ台に現れたが、これらの鳥とは別に単独で行動していた。鳴き声はまったく聞かれなかった。



2003年11月15日 札幌市手稲区

観察しているうちに、シジュウカラの黒化個体というものではないのかという気がしてきた。しかし、白化個体というのは稀に聞くけれども、黒化個体などというものが出現するものなのか、自信は持てなかった。

何枚か写真が撮影できたので、帰宅後写真を整理してみると、腹部の羽毛が不自然にケバ立っていて、ベターっとした感じを受けたので、油か何かで汚れただけなのかとも考えてみた。しかし、油汚れならば、もう少しまだらな感じになるだろうし、脚はまったく汚れていなかった。ごく普通にすばやく飛び回っていたので健常であったと考えてよいだろう。

時間が経てば変色することもありうるかと思ひ、近いうちにまたこのお宅を訪ねるつもりでいたが、残念ながらこ

の鳥は、11月17日に現れたのを最後にその後は姿がないと
のことで、結局私が観察したのも一度きりになってしまっ
た。

その後識別に詳しい数人の方に写真を見ていただいたが、
いずれの方もシジュウカラの黒化個体という見解であった。
その根拠はおおむね、外国産にもこのような羽色の鳥は見
当たらないこと、羽色やくちばし・脚の形、食性などがシ
ジュウカラに最も近いというものである。現在では私自身
もそういう結論で納得しており、貴重な経験をさせてもらっ
たものだと思う次第である。

〒006-0851 札幌市手稲区星置1条6丁目8-1

檜山支庁管内の5つの河川の水鳥類

富 沢 昌 章

はじめに

檜山支庁は北海道南西部、渡島半島の日本海側に南北に細長く広がっている。天ノ川(上ノ国町)、厚沢部川(江差町)、見市川(熊石町)、白別川(大成町)、後志利別川(北檜山町)の5つの河川は南から北に順に位置している。5つの河川の各河口付近で、主に水面や水辺にいる水鳥類の種類と個体数を双眼鏡と望遠鏡を用いて観察し、記録した。同時に川周辺のヨシ原湿地や草原で観察される猛禽類や小鳥類等もその種類を記録した。1998年(平成10年)6月から1999年(平成11年)5月まで、5つの河川とも各月1回、合計12回の調査を実施したので、その概要を報告する。

調査結果

観察された水鳥類は5つの河川の合計でカイツブリ目3種、ペリカン目1種、コウノトリ目4種、カモ目18種、ツル目1種、チドリ目16種、合計43種であった(表1)。これにタカ目6種、その他の小鳥類等33種を併せると82種の鳥類が観察された。観察数ではチドリ目が最多で約73%、カモ目が約18%、ペリカン目が約6%、コウノトリ目が約3%であった(図1)。それぞれの目ごとに観察された種類や時期や観察数について特徴な点を次に述べる。

1 カイツブリ目

カイツブリ、ミミカイツブリ、ハジロカイツブリの3種が観察された。カイツブリは春から夏に、残りの2種は秋から冬に観察されたが、少数であった。また、天ノ川と厚沢部川の2河川だけで観察された。

2 ペリカン目

ウミウが4月から11月に多く、特に7月から9月には多数観察された。12月から翌年の3月まではほとんど観察されなくなるが、冬に川面が凍結すると河口付近に飛来しなくなるだけで、海では観察された。

3 コウノトリ目

アオサギは1年中観察され、5つの河川すべてで観察された。11月から翌年1月にも天ノ川だけではあるが少数観察され、一部は檜山支庁管内で越冬していると考えられた(図2上)。ダイサギは3月から6月と10月と1月に、コサギは7月と8月に少数であるが観察された。シラサギ類は北海道では希な夏鳥とされていたが、近年飛来数が増加中とされている。今回の調査でも観察数はあまり多くないが比較的普通に記録され、特にダイサギは観察される回数が多かった。迷鳥のヘラサギが厚沢部川で1998年6月21日に観察された。少なくとも、前後約2週間の期間、厚沢部川で観察されていた。

4 カモ目

繁殖期の5月から8月にかけてはオシドリ、マガモ、カルガモの3種が観察されたが、観察数は3種とも少なかった(図2中)。9月から翌年の4月までは、種数、観察数とも多くなり、特に2月と3月には、マガモ、カルガモ、コガモ、オナガガモ、ホオジロガモ、カワアイサ、ウミアイサなど多くの種類が観察され、観察数も多かった。ただし、1月には、川面の凍結している場所が多く、ほとんど観察されなかった。一方、オシドリは9月から翌年4月までの間、観察されなくなった。また、オオハクチョウは11月と12月に、ヒシクイは12月に厚沢部川で観察された。

5 ツル目

バン1種が観察されただけで、観察された回数も観察数も少なかった。

6 チドリ目

コチドリ、イソシギ、オオジシギは4月から8月にかけて、アオアシシギ、キアシシギ、ソリハシギの3種は7月と8月に観察されたが少数であった。オオセグロカモメは1年中観察され、観察数も多かった(図2下)。ウミネコも4月から11月には多数観察されたが、12月と1月にはほとんど観察されなかった。この2種は檜山支庁管内の海岸や小島で営巣・育雛しているのが観察される。セグロカモメ、シロカモメ、カモメは11月から翌年4月までに観察され、セグロカモメとシロカモメは少数であったが、カモメは11月と2月には多数観察された。ユリカモメは7月から10月に、ミツユビカモメは11月に観察され、アジサシは8月に天ノ川と後志利別川で1羽ずつが観察された。

ている。この2つの河川は前の3つの河川に比べ川幅も狭いことが影響していると思われる。

おわりに

檜山支庁管内の南から北に位置する5つの河川で、1年間にわたり主に水鳥類を観察した。しかし、観察されたのはオオセグロカモメとウミネコがほとんどで、シギチドリ類やガンカモ類は種数もあまり多いものではなかった。檜山支庁管内は急峻な地形が多く、平野部は限られている。このため大きな湖沼もなく、河川も河口付近でもあまり川幅も広くなく、流れも穏やかなところは限られている。このことが飛来するシギチドリ類やガンカモ類が少ないことに影響していると思われる。一方で、岩場が多いためにイソヒヨドリやアオバトが多く見られ、また、本州に近いためシラサギ類も観察されたことが、特徴的な点である。

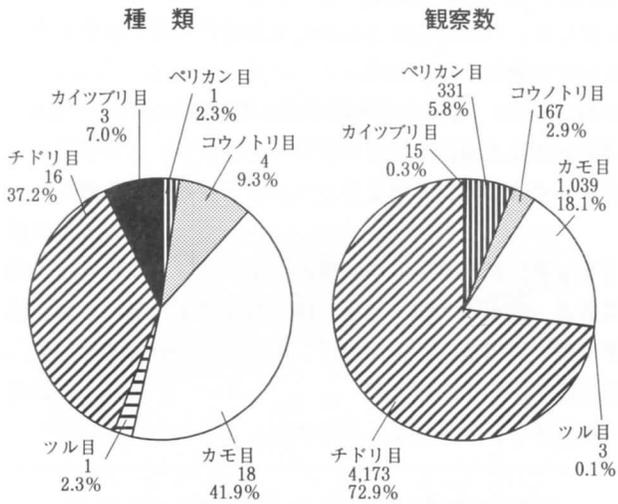


図1. 5つの河川で観察された水鳥類の合計の種数と観察数

7 タカ目(参考)

トビは1年中観察され、ミサゴは繁殖期の5月から8月にかけて観察された。オジロワシ、オオワシ、ノスリは11月から3月までに少数ではあるが観察され、ハヤブサは天ノ川で8月に1回観察されただけである。

8 その他

イソヒヨドリは河川の近くの岩場で観察された。檜山支庁管内の海岸線には岩場や崖が多く、比較的普通にこの鳥を見ることができる。調査を行った5つの河川の近くではないが、海に飛来するアオバトの群れを何度か観察した。

最後に、5つの河川を比較すると、天ノ川、厚沢部川、後志利別川ではチドリ目とカモ目が種数では同じくらい観察され、観察数ではチドリ目が約55から60%、カモ目も20から30%を占めていた。一方、見市川と白別川ではカモ目はあまり観察されず、チドリ目が種数・観察数とも多くなっ

〒043-0061 檜山郡江差町字南ヶ丘179-7

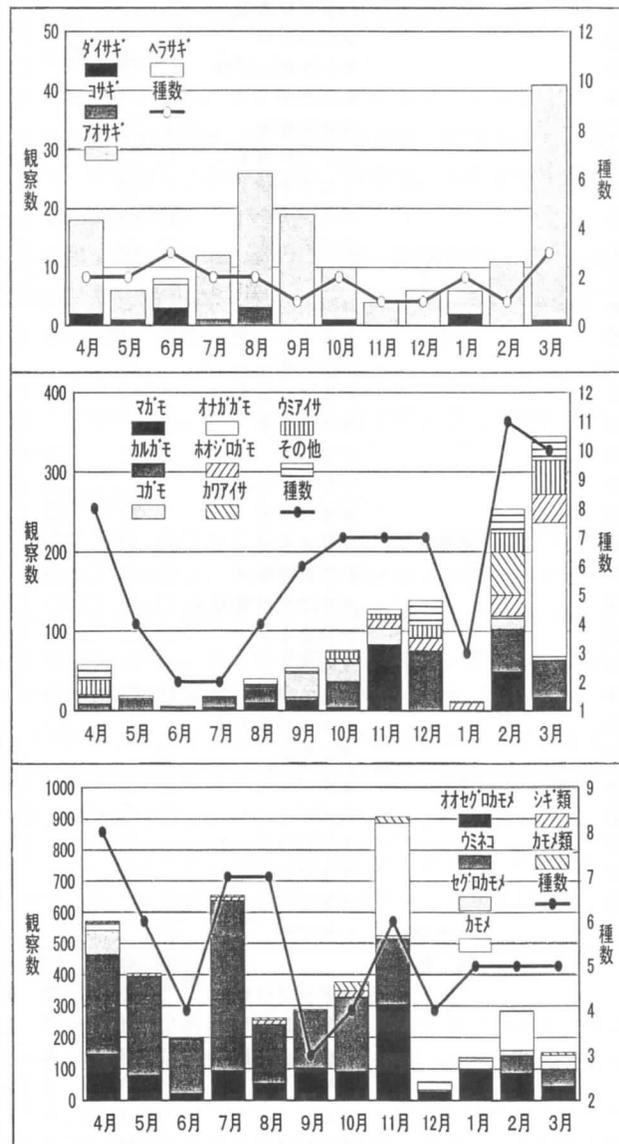


図2. 5つの河川で観察された水鳥類の月別の観察数

表1. 各河川で観察された水鳥類

No.	目	科	名	種	名	天ノ川	厚沢部川	見市川	白川	後志利別川
1	カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ			○	○			
2			ハジロカイツブリ			○	○			
3			ミミカイツブリ			○				
4	ペリカン	ウ	ウミウ			○	○	○	○	○
5	コウノトリ	サギ	ダイサギ			○	○		○	○
6			コサギ			○	○			○
7			アオサギ			○	○	○	○	○
8		トキ	ヘラサギ			○				
9	カモ	カモ	ヒシクイ			○				
10			オオハクチョウ			○				
11			オシドリ			○				○
12			マガモ			○	○			○
13			カルガモ			○	○			○
14			コガモ			○	○			○
15			ヨシガモ							○
16			ヒドリガモ				○			○
17			オナガガモ			○	○			○
18			ハシビロガモ							○
19			ホシハジロ							○
20			キンクロハジロ			○	○			○
21			スズガモ							○
22			コオリガモ				○			
23			ホオジロガモ			○	○	○		○
24			ミコアイサ				○			○
25			ウミアイサ			○	○	○	○	○
26			カワアイサ			○	○			○
27	ツル	クイナ	バン			○	○			○
28	チドリ	チドリ	コチドリ			○		○	○	
29		シギ	トウネン			○	○			○
30			ハマシギ				○			
31			アオアシシギ				○			○
32			キアシシギ			○				○
33			イソシギ			○	○			○
34			ソリハシシギ							○
35			オオジシギ				○		○	○
36		カモメ	ユリカモメ			○	○		○	○
37			セグロカモメ			○	○	○	○	○
38			オオセグロカモメ			○	○	○	○	○
39			シロカモメ			○	○	○	○	○
40			カモメ			○	○	○	○	○
41			ウミネコ			○	○	○	○	○
42			ミツユビカモメ					○	○	
43			アジサシ			○				○
44	タカ	タカ	ミサゴ			○	○			○
45			トビ			○	○	○		○
46			オジロワシ				○			○
47			オオワシ				○			
48			ノスリ					○		
49		ハヤブサ	ハヤブサ			○				
	種数					28	32	11	12	32
			カイツブリ目			3	2	0	0	0
			ペリカン目			1	1	1	1	1
			コウノトリ目			3	4	1	2	3
			カモ目			9	13	2	1	15
			ツル目			1	1	0	0	1
			チドリ目			11	11	7	8	12
			タカ目			3	4	2	0	3



野幌森林公園のたん鳥会に
さんかして
2003.12.7
琴似小学校2年
松山 遼太郎

お父さんとおかあさんとぼくの3人で初めてたん鳥会にさんかしました。林の中は、雪がたくさんつもって歩いてるのが大へんでした。でも、たくさん鳥が見たかったからがんばって歩きました。いっしょにさんかした知らないおじさん、おばさんが木のえだに止まっている鳥やどうぶつをさがして教えてくれました。アカゲラ・コゲラ・ハシブトガラ・キバシリ・エゾリスなどを見ることができました。耳をすましたらアカゲラが木をコツコツとたたいていました。思っていたより大きい音でたたいていたのでびっくりしました。たん鳥会にさんかしてお友だちもできました。とっても楽しかったです。

〒001-0905 札幌市北区新琴似5条2丁目1-7-501
【記録された鳥】トビ、コゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、ハシブトガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、ハシブトガラス

以上 8種
【参加者】岡田幹夫、小堀煌治、小山久一、川村宣子、白澤昌彦、佐々木 裕、道場 優、戸津高保、樋口孝城、成澤里美、浪田良三、吉田慶子、山口和夫、松原寛直・敏子、松山建志・順子・遼太郎
以上 18名
【担当幹事】成澤里美、戸津高保

小樽港探鳥会に参加させていただき
2004.1.18 桑木 功

私の北海道での探鳥は2001年よりのもので、道庁生活部の野生生物係小野理様に資料をいただいたのが、ご縁の始まりでした。又、今回北海道の鳥(北大図書刊行会)にて、北海道野鳥愛護会を知り、道央・道南の探鳥地の問い合わせをいたしました。そして、入会のお誘いを受け、加入と北海道内の探鳥地を紹介した「私たちの探鳥会」(30周年記念誌)を手にする事が出来ました。探鳥会当日は、数日前の冬の嵐を思わせる事の無い晴天と成りました。集合地J R小樽駅にて野鳥の会小樽支部の方々と行動を共にしながら、祝津港で多くの海鳥を見せていただきました。その後二ヶ所を経て昼食をフェリー埠頭でとり、小樽に向かい二ヶ所を加えて小樽駅前解散となりました。

さて私の持った感動については、大阪・兵庫に於いては見られない海鳥を多く、皆様のお教えを受けて見る事が出来た事です。印象に残った鳥種はアカエリカイツブリ・ウ

ミスズメ・ウミガラス・ケイマフリ・コオリガモ・(オオハム)・(ハシブトウミガラス)などでした。()については目に出来ませんでした。

小樽港以外にも1月17日：円山公園、1月19日：西岡公園(会員の品川陸生さんにご案内いただき、シマエナガ・ハシブトガラ・ミヤマカケス・アカゲラ他を見せていただく。エゾリスもカメラに収める事が出来た。)1月20日：ウトナイ湖(オオハクチョウ・ヒシクイ・アカゲラ・シメ・ハシブトガラ・シロハラゴジュウカラ他)の巡りでした。

今回の探鳥旅行で、北海道の野鳥を雪景色と共に楽しみ、同時に地理を少し知り、大いなる満足にての帰路となりました。本当に皆様方のお陰と感謝致しております。此の喜びを周辺の方々に伝え、再び訪ずれ(次回は森の鳥)と考えを及ぼしております。有りがとうございました。末筆ながら愛護会の益々のご発展と会員の皆様方のご健康とご多幸をお祈り致します。

小樽にて 北の方々 賑わいて
(集) 水鳥多く 教えるを受ける

〒661-0035 兵庫県尼崎市武庫之荘5丁目24-31

【記録された鳥】アビ、オオハム、アカエリカイツブリ、ハジロカイツブリ、ウミウ、ヒメウ、トビ、オジロワシ、オオワシ、マガモ、キンクロハジロ、スズガモ、シノリガモ、コオリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、ウミネコ、カモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ワシカモメ、ウミガラス、ハシブトウミガラス、ケイマフリ、ウミスズメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ツグミ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト

以上 34種

【参加者】井上公雄、今泉秀吉、岩崎孝博、氏家正毅、梅木賢俊、岡田幹夫、荻野裕子、蒲澤鉄太郎・則子、北山政人、栗林宏三、桑木 功、小西美美枝、志田博明、品川陸生、島田芳郎・陽子、清水朋子、白澤昌彦・瑠美子、高栗勇、高橋良直、徳田恵美、戸津高保、中嶋慶子、中正憲信・弘子、成澤里美、原 美保、原 芳明、広木朋子、辺見敦子、山形裕規、山口和夫、山本和昭、山本昌子 以上 36名

【担当幹事】白澤昌彦、梅木賢俊、中正憲信

鳥民だより

●総会のご案内

日 時：平成16年4月9日(金)午後6時30分
場 所：札幌市市民会館 第4会議室
多数ご参加下さい。

●野鳥写真展と写真募集のお知らせ

〈野鳥写真展〉

期 間：平成16年5月8日(土)～5月24日(月)
場 所：光映堂2階ギャラリー「ウエストフォー」
札幌市中央区大通西4丁目
TEL 011-261-0101

展示作業は7日午後5時30分から、撤去作業は24日

午後5時30分から行います。

お手すきの方、ご協力願います。

〈写真募集〉

写真は原則として道内で撮影したもので、サイズは四ツ切り、デジタル写真はA4版。鳥の名前、撮影者、撮影年月、撮影場所を添付して下さい。送付先は左記光映堂の小林さんまで。7日に直接持参する場合は事前に連絡願います。

作品一点につき一枚の商品券(1,000円)を差し上げます。商品券は光映堂本店、地下街店で使えます。問い合わせは小堀まで。

TEL 011-591-2836 (19時～22時まで)

●会費納入のお願い

日頃ご協力をいただきありがとうございます。この号(第135号)と一緒に郵便振替用紙を入れてあります。愛護会の健全運営のため、速やかな会費納入をお願いします。

宿泊探鳥会のご案内

ミヤコドリ、アカアシシギが待っています

平成16年度の宿泊探鳥会は根室の春国岱と野付半島で行います。地理的に遠いので、金曜日の夜に夜行バスで出発し、土曜日にたっぷり1日探鳥します。この時期、夏鳥はほぼ出そろい、シギ・チドリ類も見られます。アカアシシギは100%、ミヤコドリは限りなく100%に近い確率で見られます(見られるはずです)。

月 日：6月4日(金)～6日(日)

集合場所：札幌市中央区北大通り NHK前

集合時刻：4日午後9時30分(出発は午後10時)

宿 泊：中標津保養所温泉旅館

TEL 01537-2-0368

札幌帰着：6日午後7時頃

定 員：45名

会 費：20,000円(バス、宿泊、全食事込み)

申込み先：蒲澤会計幹事

TEL 011-663-9783

4月1日午前9時から電話で受付け、定員になり次第締切ります。

行動予定

1日目：根室へ(途中高速道路利用、車中泊)

2日目：午前7時頃に根室到着。朝食後、春国岱で午前中探鳥。昼食後、野付半島に移動して探鳥。午後6時頃中標津保養所温泉旅館へ(泊)

3日目：宿泊旅館周辺で早朝探鳥。午前7時に朝食。同8時に出発し開陽台を展望後、阿寒で昼食。午後1時頃、阿寒を出発し札幌へ(途中高速道路利用)

★2日目朝、昼食、3日目昼食の場所は手配中。



☆探鳥会は、悪天候でない限り開催します。

☆昼食、雨具（防寒衣）、観察用具、筆記具、図鑑を持参ください。（融雪期や雨天の時は長靴が必要）

☆公共の交通機関を利用される方は、事前に時間などをお確かめのうえ参加ください。

☆探鳥会の問い合わせ

（社）北海道自然保護協会 ☎ 011-251-5465 午前10時～午後4時（土・日祭日を除く）

開催日	探 鳥 地	集 合 場 所 及 び 時 間
4月11日(日)	野幌森林公園	大沢口 午前9時集合
	新札幌駅発 夕鉄バス（文京通西行 大沢公園入口下車） JRバス（文京台循環線 文京台南町下車）徒歩5分。 防寒衣、長靴が必要。 春の花たちが咲き始める残雪のある公園内で、さえずり、ドラミングを聞きながら探鳥します。	
4月25日(日)	宮 島 沼	大富会館うら湖畔側 午前10時集合
	JR函館本線岩見沢駅発と札沼線（学園都市線）石狩月形駅発、中央バス（石狩月形駅又は岩見沢駅行）、大富農協前下車 徒歩10分。 雪解けの湖面にマガンたちの大群が羽を休めます。壮観な飛翔群は春の風物詩、感動します。	
5月2日(日)	藤 の 沢	白鳥園 午前9時集合
	定鉄バス定山溪線 藤野3条2丁目下車 徒歩15分、または藤野4条5丁目行 藤野4条2丁目下車 徒歩10分。 早春の花や芽吹きを感じながら、白鳥園の裏山（藤野マナスル）の探鳥と散策を楽しみます。	
5月3日(月)	野幌森林公園	大沢口 午前9時集合
	交通機関は、4月11日の案内参照のこと。 新緑の森林内は、ミズバショウなどの花の盛りです。キビタキ、オオルリなどを探鳥します。	
5月9日(日)	千歳川周辺 早朝探鳥会	孵化場手前橋付近 河川敷小公園 午前5時集合
	早朝のため、公共交通機関はありません。自家用車の相乗り希望の方は幹事まで相談のこと。 川沿いの豊かな自然の宝庫の中で、オオルリやヤマセミなどを探鳥します。防寒衣必携のこと。	
5月16日(日)	野幌森林公園	大沢口 午前9時集合
	交通機関は、4月11日の案内参照のこと。 新緑の森林内は春の息吹に彩られ、勢揃いした夏鳥たちのさえずりを聞きながら探鳥します。	
5月23日(日)	鶴 川 河 口	JR日高本線 鶴川駅前 午前9時30分集合
	JR線鶴川駅下車。道南バス 鶴川農協前下車 徒歩5分。 砂浜や人口干潟ではシギ・チドリやカモメ類を、牧場では草原の鳥たちや猛禽類を探鳥します。	
5月30日(日)	東 米 里	東米里小学校正門前 午前9時集合
	地下鉄菊水駅発 JRバス（米里線）東米里小学校前下車。 カッコウの声がわたる初夏の草原で、エゾセンニュウ、コヨシキリなどを探鳥します。	
6月4～6日 (金、土、日)	春国岱・野付半島等	別 途 掲 載
	道東の鳥 宿泊探鳥会。定員45名、貸切バス利用（4日夜発）詳細は案内文を参照のこと。 優れた大自然が残る湖沼、湿原、干潟で、ミヤコドリ、アカアシシギなどを探鳥します。	
6月12日(土)	平和の滝 夜の探鳥会	平和の滝駐車場 午後6時30分集合
	地下鉄琴似駅発 JRバス（西野平和線）平和の滝入口下車 徒歩20分。帰りは相乗り相談を。 ツツドリ、ヨタカ、コノハズクなどの声を聞きます。懐中電灯や防寒、防虫の備えが必要。	
6月13日(日)	植苗ウトナイ	JR千歳線 植苗駅前 午前9時10分
	JR千歳線 植苗駅下車。 ノゴマ、コヨシキリなどの草原・原野の鳥たちを探鳥します。シマアオジが出れば…最高ですね。	
6月20日(日)	野幌森林公園	大沢口 午前9時集合
	交通機関は、4月11日の案内参照のこと。 森林内では鳥たちの営巣の季節。樹葉の中を忙しそうにエサを運ぶ鳥たちを探鳥します。	

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人2,000円、家族3,000円（会計年度4月より） 郵便振替 02710-5-18287
〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465
HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>